

【OPEN・2009/3/12】

武藤一羊「《第5回》もう一つの世界への道を探る ハート、ネグリの批判的検討を手がかりに」

二〇世紀の政治思想と社会運動、社会評論社 1998 年所収

## 社会運動と分水嶺としての一九六八年

象徴的な意味での一九六八年を二〇世紀の社会運動を前後に区切る分水嶺とする考えにわたしは組して、現在から未来へかけての社会変革運動を考えるさいに、この時期にいつも立ち返る必要があると思っている。一九六八年はベトナムで解放戦線がテト攻勢をかけ、米国の戦争計画を破綻させた年であり、フランスでは五月闘争がわきおこり、チェコでは2000語宣言と発表とソ連軍によるプラハ蹂躪が起こり、アメリカではマーティン・ルーサー・キング師の暗殺が全米に都市黒人の暴動を呼び起こし、中国では文革の嵐が絶頂にあった年である。その前年には「二つ、三つのベトナムを！」と国境を越えた国際主義の実践に身をかけたチェ・ゲバラがボリビアで戦死し、日本では一〇・八羽田闘争の衝撃が「街頭実力闘争」の時代を切り開き、ベ平連の脱走米兵援助の発表が人々を驚かせていた。日本では大学革命、東大解体などというまったく新しい理念をかかげて、日大、東大など全共闘運動が高揚していた。これらの闘いは状況も課題もひどく異なったものでありながら、そのラディカリズムにおいて著しい同時代性を共有していた。起源において異質な民衆の行動が、それぞれ新しいメッセージを発しながら国境を越えて響き合ったこの時期は、おそらく二〇世紀の歴史の中で希有なスペースを一時創り出した。日本の広義新左翼運動もこの空間のなかで噴出した。六八年とは、この時代 一九六五年から七〇年代初頭まで一を象徴する年であった。そしてこの時期を挟んで、何かが変わったのである。ルールが変わり、常識が変わった。すなわち文化が変わったのである。

だがそれは三〇年前の出来事である。いま二〇代の人々が生まれる前の出来事である。いまさらそれを振り返ることに、一般的に過去から学ぶ必要以上のどんな意味があるのだろうか。もしあるとすれば、それは「今」を理解するためであろう。今ある社会運動の状況、だれも疑わず常識となっている前提などは、六八年という分水嶺を越えたことで存在しているとなわたしには思えるからである。新薬の広告でよくある「使用前」「使用后」である。「使用前」と「使用后」の間には「使用中」があっただろう。「使用中」を経てはじめて「使用后」の今があるとすれば、どんな効能と副作用のある薬を使ったのかを忘れるわけにはいかない。起こったのは社会運動のパラダイムの変換であるが、この変換は激しい運動的プロセスをつうじておこったのである。

分水嶺はある領域を二つに分ける。この場合は、一九六八年期を境に時間的に前後に分割する。「使用后」の様態は「使用中」の様態によってかなり大きく決まってくる。だがその延長ではない。分水嶺を越えたところで開ける地形と景観は、それ以前とはまったく違って、そこを進むには地図を作り直し、歩き方を変えなければならない。地図の作り方も再考することが必要であり、地図をつくるとはどういうことか、も考え直さなければならない。その中で、地図はいらない、という考えが主張されている。地図とは何？という声もある。地図をつくらうとすべきではない、いや許さないとする強力な声もあげられる。許さないとする声の多くは、分水嶺を越えたところから歩きはじめた人々ではなく、それ以前に歩きはじ

めた人々によって発せられることが多いのも特徴である。分水嶺について論じることは、過去を振り返ることであるが、それはこれらの声との対話・議論のなかで、新しい地形を探り、そこでの歩き方を発見する試みの不可欠の部分として始めて意味をもつだろう。逆に言えば、後者のなかに歴史性を回復する試みとしてである。

ではどんな変化がおこったのか。パラダイム変換の指標のいくつかを日本の場合に即していささか無味乾燥な箇条書きにすれば次のようになるだろうか。

- ( 1 ) 政党系列化運動の例外化、自立・自律的運動の常識化。
- ( 2 ) 権力についての視座の転換。外在的にとらえられた国家権力への抵抗に還元されない日常的社会関係における権力の解体の追求。したがって政治の再定義。
- ( 3 ) 「全国政治闘争」を普遍的集約点とする組み立てから、個別課題(イシュー)別運動への転換(マクロからミクロへ)縦割りの固い組織からネットワーク型の組織へ。
- ( 4 ) 関係性に媒介された個の解放 - 感性的な解放を含む - としての社会運動。自己を目的達成への手段に還元する自己犠牲的禁欲主義の否定。だがこれは、同時に戦後啓蒙主義の説いた「近代的自我」確立とは区別される。
- ( 5 ) 「生活」の主題化。身体の主題化。
- ( 6 ) 差別をめぐる新しい問題構成の導入と定着。
- ( 7 ) 普遍的解放主体としての労働運動の特権性の否定。
- ( 8 ) 開発・近代化についての批判的視点の定着。
- ( 9 ) それと関連しつつまた地域住民闘争を母体にしてエコロジカルな思想潮流と実践 の出現。
- ( 10 ) アジアとの関係における近代日本国家(日本帝国主義)批判の視点の獲得。
- ( 11 ) 国際的ネットワークの日常化。

分水嶺をはるか後にする今、これらのいくつかは、むしろ当たり前のことで、取りたてて言うのがおかしいほどである。例えば( 1 )の政党系列化を取り上げてみよう。今では、社会運動が自立していることが当たり前であって、どれかの政党が指導者の地位を要求したりすればかえって常識に反することになる。だが六〇年代前半までの運動は、その逆がむしろ正常だったことは忘れられがちである。一九五四年に杉並の主婦のイニシャチブから始まったとされる原水爆禁止運動は社共の連合が取り仕切っていて、事務局は共産党員と少数の社会党員から構成されていたが、そのこと自身を疑う常識はなかった。労働組合は総評は社会党、総同盟(その後名称はいろいろ変わるいわゆる右派組合)は民社党(右派社会党)の指導下にあり、全学連は共産党、後には共産党から分かれたブントその他の指導下にあって、それが当然とされていた。一九六〇年安保闘争は、社会党、総評、ブント全学連の同床異夢の連合によって率いられた「大衆政治闘争」であった。この闘争では共産党の「焼香デモ」路線と全学連を中心とする決戦路線・行動の間で激しい闘争が展開され、全学連側にたつ左翼文化人は、共産党を激しく批判したが、いま当時ブント全学連側に立った左翼知識人たちの評論を読み返すと、批判は共産党が前衛としての役割を果たさないこ

とへの失望の表明であることに改めて驚く。大衆を革命に導く本来の前衛党という観念はこの時代にそれほど深く根を下ろしていたことを、われわれは忘れがちなのである。このような観念はいまや消失した。そしてその境となったのは六八年期であった。ここではパラダイム変換は明らかに起こったのである。

右にあげた指標の逐一について説明する紙幅はないが、同様な「常識」の変更が分水嶺を境に起こったことはだれにでも確認できる。この時期以降の新しい運動の展開とそれに伴う物の見方の大きい変化 第二次フェミニスト運動の展開と社会運動全体の女性化、オルタナティブな生協運動の出現、エコロジーの観点の定着、自立した地域住民運動の新しい波の拡大、先住民としてのアイヌ運動の発展などなどは、それ以前の時期にはなかったものである。

パラダイム転換のなかで生み出されたさまざまな社会運動を、日本の場合も含めて、広義の「新しい社会運動」と呼ぶことは許されるであろう。それを理論化しようとする試みが主として七〇 八〇年代にかけてのヨーロッパの経験に密着して行われたことから、ヨーロッパ中心のモデルであるという弱点を抱えているけれど、アルトゥール・エスコバルがラテンアメリカを例にとって指摘するように、パラダイムの転換はもっと広いものである。<sup>1</sup>

イマニュエル・ウオラスティンは、G・アリギ、T・ホプキンスとの共同論文のなかでかなり大胆なことを述べている。よく引かれる文章だが、もう一度引用してみよう。

世界革命はこれまで二度あっただけである。一度は一八四八年に起こっている。二度目は一九六八年である。両方とも世界を変化させた。・・・どちらの場合も、民衆の熱狂と急進的改革のバブルが比較的短期間に破裂した。しかしどちらの場合も、革命の結果、世界システムの政治的な基本ルールが、後戻りできないほど深部から変化した。一八四八年は（広い意味での）旧左翼を制度化した。一九六八年は新しい社会運動を制度化した。その後の時代を考えるなら、一八四八年はパリ・コミューンやロシア革命の、そしてバクー会議やバンドン会議の大いなるリハーサルであった。一九六八年は何のリハーサルなのであろうか。<sup>2</sup>

ウオラスティンらの一九六八年リハーサル説は魅力的なもので、わたしはこういう言葉に大変弱いのだが、ここでは、この説そのものではなく「一九六八年は新しい社会運動を制度化した」という部分に焦点を当ててみよう。ウオラスティンによれば、リハーサルとしての一八四八年革命の敗北から反システム運動が引き出した教訓は「国家を取れ」というものであり、それはロシア革命や民族解放闘争として「本番」において実現したのだが、このリハーサル後の過程で起こったことは反システム運動の「制度化」であった。ウオラスティンは別のところでフランス革命の結果、イデオロギー、社会科学、社会運動という三つの制度が創り出されたと論じているので、運動の制度化は一八四八年よりずっと溯ることになるけれど、それは問わない。<sup>3</sup> ともかく一八四八年から始まった過程は一旦閉じ、一九六八年のリハーサルから新しい本番へ向けての過程が始まったことになる。そしてこの二度目の革命＝リハーサルは、新しい社会運動を制度化したという。

第一の制度化はなじみ深いものである。政党、労働組合などはダイナミックな民衆運動から生まれた運

動が制度化された典型である。ウオラステイン独特の見方では、ロシアや中国などの「勝利した」革命権力も世界システムに包摂されていたので、国家間システムのルールに縛られる反システム運動の制度化された存在形態に過ぎないということになるので、こうした国家も制度化された社会運動の範疇に入る。メキシコには制度的革命党などというものもあるのである。

だが第二の制度化、新しい社会運動の制度化とは何であろうか。

それを明らかにするためには、分水嶺自身（「使用中」）の構造をもう一度振り返る必要がある。この時期の運動はダイナミックな予測しがたいプロセスであり、「制度化」の反対物に他ならなかった。そこから生み出された運動はいかにして制度化されるのか。それを尋ねることはこの歴史的に特殊な運動に固有の制度化の契機を取り出すことになるだろう。

広義新左翼運動は内部に緊張関係をはらむ複合的な全体を構成するプロセスであった。この緊張の性質を調べるのが鍵であるように思われる。当時さまざまなバイナリーな極の間に緊張関係が存在したことが見て取れる。順不同で取り出してみると例えば—

- # 全体構造の変革と社会関係の現場における変革
- # 闘うものと支援者
- # 衝突する利害の解決形態への模索（例えばウーマンズリブ、障害者）
- # 外部性（他者性）と自己同定
- # 生きることと闘うこと。

緊張の極はこれに尽きるものではなく、またこれらの緊張構造にはそれぞれ固有の場と論理があって、ここでその各々に即して検討する余裕はない（それはこの時期の運動の総括そのものになるだろう）ので、ここではわたしが何を言いたいのかを明らかにするためだけに、最初の二つをとりだして考え、そしてこれらの緊張構造に通底する一つの契機にたどりつきたい。

この時期（それを広義新左翼の時代と言ってもよい）の際立った特徴は、新左翼党派と呼ばれた行動集団が突出した役割を果たすことで、状況の流動化を促したことであった。諸党派は、それぞれの綱領的立場の他党派への優位を誇示しつつ、ときに暴力的に互いに競争しあう存在であった。それぞれの党派の綱領的立場（イデオロギー）は普遍性を主張した。典型的には、帝国主義・「スターリン主義」（さまざまなバージョンがあるのでカッコに入れた）の世界的体制（その部分としての日帝と日共）が打倒すべき全体であり、それにたいして、党派は全体を代表し、指導する普遍的な解放主体である。これに対して大衆運動は部分しか代表せず、したがって前衛党の指導下におかれるべきである。これは古典的な前衛党主義であって、どうみても「新しい」とはいえない。

しかしこの前衛意識に導かれたその行動は社会的に別の意味を獲得した。ベトナム戦争が世界をゆるがし、この汚い戦争への日本の負担が露骨になっていくなかで、何よりもこれらの党派の主導する街頭での機動隊との激しい闘争が、多くの人々の心を揺り動かし、行動への突破口を開いた。それは従来の左翼主流の「大衆動員・議会への圧力」というルールをぶち破ったという意味で新しかった。それは状況の流動

化をもたらした。

この流動化のなかに、突然のように噴出した全共闘運動の思想・行動・組織原理は、党派のそれとは異質なものであった。それは新しかった。運動の論理、エートス、組織は、党派のそれとも、またそれに先行する全学連学生運動の伝統とも、断絶したものであった。権力は、大学の外部、上方に聳える国家としてよりも、その国家（帝国主義）が、教授会の特権的學生支配や、学問や教育のあり方や内容を含めた大学という制度そのものに内在化された抑圧的關係としてつかみ直された。そればかりでなく、特に特権的エリート養成機関である東大の場合、この關係は學生自身に内面化されていることが自覚され、つかみ出された。「大学解体」のスローガンや「自己否定」という考えが何万という學生たちに受け入れられる状況は前代未聞のものであった。それは明らかに「新しい」運動であった。

全共闘運動は直接には学内の關係から生じるイッシュウ それは學生の処分だったり、学校当局の使い込み事件だったり、學生寮の自治権だったり、學生生協への学校当局の介入だったり、想像もつかぬほど多様だった—にこだわり、取り組んだにもかかわらず、それが「学内民主化」の運動とはまったく違ったものだったことが想起される。（マスコミ主流も旧左翼もこの違いを理解できなかった）。学内の抑圧的社會・イデオロギー關係は、全社会的な、またイメージとしては世界的ですらある抑圧的關係・構造に組み込まれ、機能しているのであって、個々のイッシュウはこの構造の例示的現實としてつかまれたのである。そうだとすればこの運動は、キャンパスの垣根を越えて、社會全体の下からの解放的變革の射程をもたざるをえない。しかしその實態は學生運動であるにすぎないので、全體の變革という普遍的な命題は、キャンパスを越えた展開形態をもちえない。その欠落を觀念上で満たしたのは、新左翼諸党派の主導する「全國政治闘争」=街頭における機動隊との物理的対決であった。「ノンセクト・ラディカル」が思想的に主導した全共闘運動と新左翼前衛主義の運動形態としての反日帝政治闘争とは異質の結合であり、無理があった。以前わたしはこの關係を、全共闘の下半身への党派政治の上半身の接ぎ木と呼んだことがあるが、この異質の結合は避けられぬものでもあった。下半身は全身を要求したのである。だが己がじしの上半身を育てる力を持たなかったのである。相互間にはその接触面でかなりの規模で相互浸透が起こっていたけれど、兩極の間の緊張は激しいものであった。運動のダイナミズムはむしろこの緊張によってもたらされたのである。いたるところで激しい論争が起こった。論争は暴力的対決と背中合わせであって、「内ゲバ」に象徴される政治的病理現象の蔓延につながり、運動全体の自滅をもたらすのだが、三〇年を隔てた今、このダイナミズム全体を病理現象に切り縮めて切り捨てる見方は、不毛であろう。このダイナミズムは、普遍的解放、あるいは全体化へのプロセスを準拠基準とする場において起こったことをもう一度取り出してみる必要があるとわたしは考えている。そうでなければ論争が起こる土俵はなかったであろう。病理現象はこの時期の全体化構造そのものから由来する。

もう一組の緊張關係として、自立的な地域住民運動と「支援」の關係を取り出してみよう。この時期、三里塚と水俣という二つの強力な、しかし性格においてまったく違う闘いの焦点が存在し、この二つの中心をもつ楕円として、自立した無数といえる地域住民闘争の社会的空間が構成されていた。この空間は二次元的ではなくて、新左翼の創り出した政治次元と不整合に噛み合う形の三次元的構造を備えていたことも付記しておこう。全體の關係はダイナミックであり、衝突・葛藤に彩られるとともにその過程的解決をも含むものであった。諸傾向は対立しあい、その間には活発、激烈な相互の批判が取り交わされたが、こ

うした相互の批判は、何らかの「全体」を参照基準とする言説空間が形成されていたことを表している。

この空間を特徴づけていたのは闘う主体と支援者の関係であった。三里塚の空港反対同盟農民たちと党派から無党派にいたる支援グループ、水俣の被害者たちの運動と現地・全国の支援グループなどの関係は、社会的な運動空間を成立させる本質的な契機であった。闘う当事者と支援の間には絶えざる緊張が強いられた。この緊張関係についてわたしは以前に次のように書いたことがある。

支援者は直接当事者でやない。自分の土地が取り上げられるわけではないし、公害の直接的被害を受けているわけではない。にもかかわらず、現場の闘争に外からかかわる。このような「かかわり」は、直接の利害関係を越えたなんらかの立場を前提にする。それは現場を位置づけ、自分の本来の立脚点をそれと関わらせる作用を働かせる。そうでなければ「かかわる」ということは生まれない。ここに働いているのは普遍化の力である。しかし・・・闘う者たちと相互作用するなかで、その普遍が影響を受け、つくりかえられる経験を伴う普遍化である。それは「かかわる」ことによってももとの立脚点がゆらいだり、否定されたりすることが賭けられているような「かかわり」である。しかし普遍化の力は支配の力としても働く。そこで、闘う者と支援する者との緊張・摩擦が生じる。闘う者・支援者という構造は、この緊張を絶えずはらみながら、その矛盾を運動させることで展開される普遍化構造である。4（

この時期の運動のなかにはこうして強く全体化（普遍性への推力）の契機が働いていた。この契機は単一のものではない。党派のそれと全共闘運動のそれとは上に見たように異質のものであった。前者は、分水嶺の前から持ち込まれた垂直的統合による上から下への全体化の契機であったのにたいし、後者は下から上へ、あるいは横への全体化の推力を潜在させていた。党派的全体化は前時代から引き継がれたものであったが、全体化の契機そのものがそうではなかった。新しい全体化、全体化の概念自身の更新が始まっていたのである。例えば、闘うもの／支援の関係は（支援には党派も含まれそこでは垂直的統合の契機が強かったとはいえ）、双方の間の絶えず変動する引力と斥力の均衡の上に成立する全体化構造を表していた。どちらかという支援は全体化側の極を代表したけれど、全体化役割への権利を主張することを厳しく自戒し、支援としての自己の立場をみずから問いつつ働く存在であった。だが全体化作用は明らかに働いていた。全体化とは、局所的闘争や 이슈別運動の社会化とを意味するだけではなかった。社会化の過程は、多くの場合、闘いの歴史化、あるいは歴史性のつくりなおしに裏打ちされたものであった。それは例えば水俣闘争における石牟礼道子の語りの意味を考えれば明白であろう。支援が全体化の契機を独占したわけではむろんない。暴力的対決という特徴でつかまれることの多い三里塚でも、闘いを通じて「大地」や「風景」という概念が農民自身によって世界観のレベルにつくりなおされ、闘いの支えとなった。

この時期の運動をいざという他の緊張の極を検討する紙面の余裕はここではない。だが先にあげた緊張関係は、それぞれ検討してみれば、他者との相互作用を通じて全体化する働きとして起こったことを確認しうるのである。それは広い意味で対話的な関係、言説的關係を随伴し、文化を変えるものであった。その意味で、この時期の諸運動は、アラン・トゥーレーヌが「歴史的行動」と呼ぶ水準の行動を表していた。トゥーレーヌによれば、この水準は、経済的要求をめぐる組織的水準、政治的圧力集団の行動する政治的

水準を越えて、社会運動が文化的パターンに異議を申し立て、新しい文化的パターンを創造する歴史性（historicity）の水準である。トウレーヌの歴史性とは、社会が社会運動によって自分自身の方向性を変革し、新しい目標と「規範性」（normativity）を創り出す能力をあらわしている。5「規範性」とはすなわち「使用後」の常識であろう。一九六八年期という劇薬の「使用中」に、日本社会はこのつくりかえの能力を実証したのである。

この時期と現在（「使用中」と「使用後」）の間には深い断絶が横たわっている。だが最初に述べたように、分水嶺を挟んで日本社会の常識、そして政治的ルールが後戻り不能に変化したことも事実である。それはあの劇薬「使用」のためであるから、連続を否定することはできない。この断絶と連続の関係をどのように了解すべきか。

ウオラステインらによれば、一九六八年の「革命」は敗北し、その結果「新しい社会運動は制度化された」のである。六八年期に社会運動は「制度化」の対極にあった一制度化の拒否がそのもっとも強い動因だった一のだから、断絶は明らかである。制度化は運動の敗北の結果であるけれど、制度化そのものは社会運動の獲得物の定着であるから、前進とか勝利とか表現してもいいものである。かつて労働運動が労働組合や労働者政党として合法化され、制度化されたとき、また第一次フェミニスト運動が参政権を獲得したとき、それらは勝利と見なされたし、事実勝利以外のものではなかった。

六八年期の社会運動の敗北をつづじる制度化を同じ観点で勝利、あるいは獲得物とみることができる。それは社会運動のなかだけでなく、社会全体のなかに獲得物が薄められつつ広く定着したという意味での制度化である。制度化とは「体制内化」とは別の範疇に属する。制度化の土俵の上に体制側と体制を越える力が分岐し対決するのである。かつての制度化は「国家」をめぐる闘いを常態とする制度化として成立し、その基盤の上に革命党と社会民主党という体制対抗勢力が生まれ出された。六八年期の社会運動の制度化は社会運動にどのような特徴を付与しただろうか。

六八年期からの移行において獲得されたのは、イッシュウや関心に沿って横へネットワークを広げていく自由さである。逆に失われたのは全体化への内的推力から生じる緊張関係である。この両者は一つのものであって、それを特徴付けるのは社会運動のさまざまなレベルそれぞれの機能化であるということができよう。機能はそれぞれ自立し、社会運動はその機能を各々の領域においてどこまでも発展させることを追求する。社会運動の制度化とは運動の機能化をうながし、保証する条件の生成にほかならなかった。この条件の下で、イッシュウ別の運動ネットワークは他のイッシュウの運動にわずらわされたり干渉されたりすることなく、のびのびと発展することができた。だが同時にこうしたイッシュウ別運動間の緊張をはらんだ相互作用は大幅に失われた。お互いの中に踏み込む論争はほとんど起こらない、というか回避されるようになった。かつては相互作用を成立させていた参照枠としての全体が明らかに失われたのである。

だが全体が失われたわけではない。全体は、それ自身がイッシュウとして機能化されたのである。解決のためには全体の構造を変えなければならないような大きい問題、たとえば資本によるグローバル化、地球温暖化、核問題など、はそれぞれが単一のイッシュウとみなされ、それにとりくむ専門グループの活動対象に機能化された。そしてイッシュウ別に資源が動員・蓄積され、情報は公衆に開かれたものにされた。知識はこうして社会全体のなかに蓄積されるようになった。これ自身は以前には見られなかった

積極的な変化である。しかし同時にこれは全体の個別化という代償を支払って獲得された成果であった。そして全体の個別化とは一つの背理であることを消し去ることはできないので、代償の支払は運動の側に跳ね返った。すなわち、全体を変える実践が、全体的含意をもつイシューについての国連や政府の政策への介入・「参画」（ロビー活動）に引き寄せられ、再解釈されることになったのである。このようなタイプの実践（それがそれ自身大きい効用をもつことは疑いないのだが）が、多数の民衆集団の実践が緊張をはらむ相互の関わりを通じて全体を次第に構成してゆく実質的・言説的プロセスに大幅にとってかわったのである。NGOが支配的な運動範疇の一つとして出現する。全体にかかわる機能的主体として、NGOが民衆運動体にとってかわったのである。新しい社会運動の制度化はさしあたりこのような移行によって特徴づけられているとわたしには見える。

かつての「支援グループ」の今日の対応物はNGOである。「支援」とNGOは機能的には似通っている。しかし前述のように「支援」は闘う人々との緊張関係において存在し、そのなかで絶えず自分の位置を点検し、自分を変えることを迫られていたのにたいし、NGOと呼ばれる主体の存在仕方は、もっぱら自己肯定的なものである。他者との関係によって自分のあり方の根本が揺すぶられるという契機が、ないとはいえないにせよ、微弱である。だから社会のために役立つ機能を果たしているという自覚において楽天的であり、明るい。国境を越えたつながりは、かつては国際連帯の文脈で追求されたが、それは行動者が、世界的な抑圧構造のなかでの自分の位置を再発見し、この構造と向き合い、それと対決する実践をうながす契機をはらんでいた。国際連帯として語られ追求されてきたこうした実践は、NGOによる開発援助と政策提言（アドヴォカシー）に横滑りすることで、他者との関係が自己にはね返り、突き刺さる危険から安全に遮断される。

この問題性は狭義のNGOだけのものではなかった。大きい大衆的広がりをもった運動の中に八〇年代末、伊方原発の出力上昇試験に反対するパワフルな女性たちの反原発運動が沸き上がったことがある。チェルノブイリ事故の衝撃のなかで「原発やめて、命が大事」をかかげて、別府の主婦たちが、これまでの運動の伝統的運動の仕来たりをバイパスして、自前で、直接一人一人の女性たちに自己責任で行動を呼びかけ、署名を集め、署名者を自発的行動者に変え、ダイナミックな現地結集、対決をふくめて一〇〇日間のキャンペーンを展開したいわゆる「ニューウエーブ」の運動である。この運動は、驚くべき波及力でとくにそれまで運動とは関係ない女性たちの間に広がり、既成の運動に強い衝撃を与えたあと、消滅した。そこで強力に主張され貫徹されたのは、組織はいらない、いのちを守ることを願う一人一人の「私」対四国電力だ、という原則であった。一〇年前のこの運動が何であったかは十分に総括されていないけれど、わたしには、この運動が「使用中」からの「使用後」の断絶の画期をなす出来事だと思われる。

故埴野佳子は「ニューウエーブ」の活気にみちた高松での集会に参加したあと、洞察に満ちた総括を書いた。

一方の極に私の肉体、他方の極に原発があり、その間に存在する膨大なひと・ひとに、どれだけ私の肉（体の）声をとどけられるか—というように、いま人々は「原発イラン、命がダイジ」と声をあげる。私の肉体はいっさいの媒介なしに、世界とむきあい、そこには国境もなく、「現地」と都市の区別もなく、ひとびとはたんにきにひととして存在しているかのようである。・・・いま私たちがまのあたりに



しているのは、私と世界とを媒介してきた古典的範型のまったき解体ということなのだろう。原発をめぐるニューウエーブとでもいうべき人々の身振りは、まさにその解体の表現にほかならない」。

埴野は「いづこも現地」、だれでも平等に当事者という迫りかたをする「ニューウエーブとしてあらわれ出た彼女たちは、原発立地の現地、或いは予定地の現地で、様々な圧力をはねのけ、生きることを余儀なくされている人達の思い、強靭さに思い至ることが、少ないのではないかと、私は思えてしまう」と言う。わたしの言葉で言えば、現地でたたかう者と外から来た者 その後者も当事者であるがーの区別と相互の間の緊張は最初から退けられる。そこには闘うものと支援の緊張が呼び起こす全体への推力が欠如している。このような立場は、世界の民衆全体をいとも容易に「地球市民」と呼んでしまう立場につながっている。わたしには、「地球市民」の集合という全体像は貧困であるばかりでなく傲慢ですらあると思われる。

新しい社会運動の制度化とは、とくに日本において、「自分と世界とを媒介してきた範型の解体」という著しい特徴をあらわにしている。埴野はそれを「古典的範型」としたが、わたしはむしろ六八年期の範型の解体をつうじた範型そのものの解体と読み替えたい。埴野は、「相手の総体に迫るための多様化」を探ろうとした。「(原発)推進側の総体をゆさぶる、とは、原発を招いてしまう社会のあり方の根底を問い直すということであり、原発など必要としない社会のあり方を、運動として、誰の目にも見えるように提示していくということに他ならない。・・・そういう力をつくり出していく運動は、もはや、個別課題をめぐる運動の連合ではなく、社会総体を問題にしていく運動、いわば 社会運動 とでもいうべきものでなければならない」。富山に根ざして想像力とパワーに富む活動を展開していた埴野は、この大胆な展望の実現を見るまえに、われわれのもとを去ってしまった。

だが新しい範型への模索は始まっている。紙数が尽き、これらの模索に触れることはできないが、それらはいずれも新しい社会運動の制度化を基盤にしているのであって、その外にあるのではない。新しい範型はこれらの中から、全体の構築の別の諸方式の発見をつうじてやがて出現してくるであろう。だがそれは必ず制度化の外部の膨大な他数者をふくむ異質な諸集団の出会いと対話、そして緊張関係の構成と解決のプロセスを通じる全体の獲得をつうじてであって、機能的住みわけとモノローグと無葛藤状態のなかからではないであろう。

#### 注

- 1 Arturo Escobar, Culture, Practice and Politics: Anthropology and the Study of Social Movements, 1990
- 2 G・アリギ、T・K・ホプキンス、E・ウオラーステイン、太田仁樹訳「反システム運動」、大村書店
- 3 E・ウオラーステイン「脱 = 社会科学」、藤原書店
- 4 武藤一羊「新ラディカル主義の歴史と未来」、「状況」一九九三年一二月号
- 5 A. Touraine, The Voices and the Eyes, Cambridge University Press, 1981
- 6 埴野佳子「私の肉体に、私・たちの身体を」、中島真一郎他編「原発やめて、ええじゃないか」所集